

広報TSB

TOHOKU SEIKATSU BUNKA
UNIVERSITY & JUNIOR COLLEGE

第4号

平成26年3月1日発行

地域とともに

東北生活文化大学

生活美術学科長 北折 整



学園が東三番町から現在の虹の丘(当時の上谷刈)に校舎を移転したのは、昭和四十九年のことでした。この地が住宅地として造成されたのは昭和五十三年ですから、当時は人の手が殆んど入っていない鬱蒼とした雑木林でした。以来四十年、現在では大型店舗等の商業施設をはじめ住宅が立ち並び、仙台のベッドタウンとして目覚ましい発展を遂げました。

さて、大学が社会に開かれた高等教育機関として、社会貢献に取り組み姿勢は、今では当たり前なものになりました。本学では近年特に地域に密着した大学として、その姿を鮮明にしています。平成二十三年には「地域の暮らしをデザインする力を育む大学」を標榜し、その活動の一環として地域と連携した様々な事業を推進してきました。

前号及び本号(三ページ)で紹介の「ワクワク100ぶろじえくと」もその一つとして、平成二十四年度から始動した取り組みです。この「ぶろじえくと」は地域の人たちや企業と連携し、学生が主体となつて三年間で合計100件の社会貢献活動を行うというものです。既に現在までの二年間で合計七十件を超す事業が実施されました。その内容は多種にわたりますが、いずれも大学での専門的な「学び」を活かしたもので、学生にとつ

ては、机上の学習では得がたい実践的な経験を積み場となっています。

各学科・専攻がそれぞれの特色を活かした「ぶろじえくと」について、具体例を少々紹介します。大学・服飾文化専攻では南三陸町志津川あさひ幼稚園「献燈の舞」のドレス製作、健康栄養学専攻では味の素株式会社と協力しキッチンカーを仮設住宅に持ち込んだの料理教室や栄養指導、生活美術学科では株式会社ハナサクとのコラボ「花器」の製作、短大・食物栄養学専攻では本学園が設置している「子育て・家庭支援センター」の企画する「のびのびくらぶ」の親子料理教室、子ども生活専攻では泉区加茂「カモンレインボープラン冬フェスティバル」での「ミシマレンジャー」の公演等をあげることができます。

特に大学・服飾文化専攻の学生が主体となつて行うファッションショーは、大学祭や各種市民イベントとして、学生がデザイン・製作した服を社会に発信する催しです。フライヤーの作成からショーとしての舞台美術、音響、モデルパフォーマンスなど、企画から運営まで多種の作業を学生が手掛けますので、他学科・専攻の学生も多く参加することになり、全学的な広がりを持つ事業となっています。

「地域」の範囲は、その枠組や意識、時代相などに呼応して変化しています。また、先の東日本大震災により、地域コミュニティの構築は人々の生活や命に関わる重要な問題となっています。

「虹の丘」の地名そのまま、本学からは時折大きな虹が架かっているのを目にすることができま。御存じの通り、虹は太陽の白色光が分かれたものですので、虹色は「多様性」や「共存」のシンボルとして使用されます。本学が地域の人々との繋がりを大切にし、多様な人と人との共存の架け橋として、これからの地域と共に発展していくことを念願しています。



大学家政学科

短 信



大学は授業や後期試験が終わって、にぎやかだったキャンパスが静かになり、少し寂しい感じがいたします。

昨年九月からの家政学科の様子をお伝えします。

九月十日から十三日まで、服飾文化専攻二年生の研修旅行が開催されました。この旅行は家政特別講義として行われるもので、今回は倉敷や徳島、神戸などで、アパレル企業や美術館などを見学しました。普段はなかなか見学できない場所も含まれ、有意義な研修になったとともに、仲間たちと過ごした心に残る四日間になったことと思います。

後期の授業は九月十九日に始まりました。今年度から五回の授業の後に、二週間の試験期間が設けられるようになりました。また、新たな試みとして、三、四年生による二、二年生への学習支援が行われました。

十月二十六日には、健康栄養学専攻二年生の校外研修が行われました。今回は、セントラルキッチンとキリンビール工場を訪れ、講義を受けたり、施設を見学したりしました。キリンビール工場では、リニューアルしたばかりの見学コースを見ることができました。

授業の他にも、学外のイベントや地域貢献活動で家政学科の学生たちは活躍しています。



たとえば、十月の大学祭や十二月のせんだいメディアテークにおけるファッションショーでは、服飾文化専攻の学生が中心となり、個性あふれる多彩なショーを展開しました。また、宮城県栄養士会が主催して十二月に行われた「栄養まつり」には健康栄養学専攻の三十五名の学生がスタッフとして参加し、食事バランスチェックや健康相談、食育ショータイムなどを行い、大好評を得ました。このような学科の活動は大学のホームページやフェイスブックで紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

大学生生活美術学科

短 信



夏休み最中でしたが例年通り九月上旬に美術鑑賞旅行（一、二年）と博物館実習旅行（三年）を実施しました。後期授業の開始直前には恒例の学科内コンクールを開催し、数多くの賞が授与され、五つの画廊からの個展やグループ展の企画も与えられました。十月、大学祭でのファッションショーでも本学科の学生は、制作やモデル等で大いに貢献しました。四谷シモン氏の大学特別講演は、残念ながら演者急病のため中止となりましたが、再度本学で講演をして頂ければと思います。一月に卒業制作の審査が行われ三十名の作品が二月二十八日から三月五日までせんだいメディアテークで展示されました。学生が主となって行っていた文星芸術大学との交流展「ぶんぶん展（年二回開催）」は、第十回を八月に中本誠司現代美術館で、第十一回を二月に文星芸術大学ギャラリーで開催されたのを最後に一旦終了となりました。六年近く続いた交流展でしたので、また何かの形で再開できればと願っています。その他、中本誠司現代美術館の「Gunu first collection」長い夢（本学科の学生と家政学科の有志による学科を超えたコ

ラボのファッションショー）。多くの学生、卒業生、教員たちが参加したギャラリーエノマ企画による「二〇一人の自画像展」。せんだいメディアテークでの「絵画・壁画・デザイン・彫刻合同ゼミ展」、「版画ゼミ展」。ギャラリーくろすろードでの有志学生による「クラフト展」、「おかし展」。ガラス

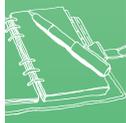


アートの受講学生たちの作品展など数多くの学生たちが、卒業生たちの活躍が目立ちました。もちろん教員スタッフも負けじと頑張っています。

アートボランティアでは、特に今年は泉区の様々な行政組織と連携し、各地でのイベント、ワークショップ等をこなしてきました。加茂地区のネットワーク、虹の丘の夏祭り、泉中央の夏祭り、区民センターの催し、泉地区大学ネットワーク、被災地の石巻、荒浜地区の子供対象のボランティア等々休み期間も参加してくれた多くの学生に感謝します。

短大生活文化学科

短 信



今年四月に食物栄養学専攻がスタートし、まもなく一年になろうとしています。後期の主な行事を振り返ってみたいと思います。

学科の行事

○十月十九日～二十日 大学祭

生活学専攻はカフェ(協力)・食物栄養学専攻、食物栄養学専攻はテーブルコーディネート展示、子ども生活学専攻はフアンタジーランドを行いました。

生活学専攻

○十二月二十日～二十二日 課題研究展

東京エレクトロンホール宮城で開催しました。課題研究は短大家政学科が教職コース・デザインコースの二コース制になった昭和四十七年度に始まりました。四十年以上続いた課題研究展も今年度で最後となりましたが、有終の美を飾ることができました。



食物栄養学専攻

何もかも初めてで、あわただしい1年でした。

○十月～二月 栄養士基礎演習

外部から講師を招いて、さまざまな食の現場での栄養士の仕事について講演をいただきました。来年度に予定されている校外実習に向けて、気持ちを新たにしました。

子ども生活専攻

○十月 幼稚園実習(二年生)

○十二月 保育所基礎実習・施設見学実習(子ども園見学実習(二年生))

○月二十日・二十八日

まずみ幼稚園の園児を招いての活動(運動遊び)を行いました。今年度から附属になったことで、連携して双方にとって有意義な教育活

動を行いました。

地域貢献活動

地域への貢献も本学の使命の一つです。一部をご紹介します。

○八月三十日他(計三日) 県民大学「食中毒とその予防法」(本学教員)



学生たちが、学んだ知識を持ってまちでさまざまな活動しています。めざすは、まちの人の暮らしをワクワクさせるプロジェクトを100個、世の中に送り出すこと。まちの人が暮らしに求めるものを思いめぐらせながら、人々の声にヒントを得ながら、学生・教員がアイデアを持ち寄り、大切に大切に、カタチにしていく。学生にとっても、社会の中で気づきを得られる貴重な機会です。

●南三陸町志津川あさひ幼稚園「献燈の舞」ドレス製作



服飾文化専攻

東日本大震災による津波で園舎を流されたあさひ幼稚園のお遊戯会「献燈の舞」で園児たちが着用するドレスを製作しました。

●第10回「いい日いい汗 栄養まつり」



健康栄養学専攻

昨年度に引き続き、学生有志たちがボランティアスタッフとして参加。食事バランスチェックや健康相談、各ブースの補助、さらに食育の大切さを来場者に説明する食育ショータイムなどを行いました。

●和紙キャンドルガーデン



生活美術学科

東北と東京からの「想い」や「力」を表現した「和紙キャンドルガーデン」。東日本大震災を実際に経験した本学の学生が「つながる」をテーマに東京ミッドタウン芝生広場のキャンドル配置図を考案しました。

●のびのびくらぶ「子どもと一緒にクッキング」



生活学専攻・食物栄養学専攻

三島学園子育て・家庭支援センターののびのびくらぶにおいて、「子どもと一緒にクッキング」を開催。3色おにぎり、うずら卵入りプチハンバーグ、にんじんスープを調理しました。

●第1回カモンレインボープラン冬フェスティバル



子ども生活専攻

加茂地区のこのイベントに短大子ども生活専攻の学生16名が参加し、お店のお手伝いやミシマレインジャーのステージ披露をしました。

「ワクワク100ぶろじえくと」は、webサイトならびにFacebookページで最新情報をご覧ください。

ワクワク100ぶろじえくとweb
<http://www.mishima.ac.jp/info/wakuwaku/>
 本学Facebook
<https://www.facebook.com/mishima.tsb>

○十月五日 ワクワクワークシヨップ「食空間を演出するマカロンタワーを作ろう」(食物栄養学専攻)
 ○十月十二日 第三回若林区荒井仮設住宅ミニ出前講座(子ども生活専攻)
 ○十二月二十日 カモンレインボープラン冬フェスティバル(子ども生活専攻)



大学服飾文化専攻 1年

新たな目標とともに後期が始まりました。「ファッションショーやファッション実習をがんばる」「授業を休まない」「洋裁のスカートを完成させる」など。

特別セミナーが二回あり、社会で活躍されている先輩や著名人から貴重な話を聞き、夢や目標に向かって自分自身を鼓舞することができました。しかし、こうしたセミナーの出席率やみんなの大学での授業の出席状況があまりよくありませんでした。先生方から「休んでいる」「欠席が多い」との連絡をいただきました。原因は体調不良だったり、寝坊だったり。来年度は二年生、全員が飛躍できる年であつてほしいと願っています。

大学服飾文化専攻 2年

昨年九月十日〜九月十三日に実施しました「研修旅行」ですが、予定していた四国・中国・関西方面の企業や博物館での研修を無事に終えることができました。心に残る旅行になったと思います。また、十月には、大学祭のファッションショーが行われました。スタッフデザイナー、モデルとしてショーの中心となつて大活躍しました。昨年引き続き、十二月の「デザインウィーク in せんだい」でも多くの観客を魅了しました。さて、もうすぐ今年度も終了し、大学生活も半分が過ぎます。三年生になると、専門科目や免許・資格に関する科目が増えます。さらに三年生の後期には課題研究も始まります。卒業後の進路を徐々に見据えると同時に、後半の二年間、悔いのない充実した学生生活を送つてほしいと願っています。

大学服飾文化専攻 3年

年が明けて二〇二四年になり、後期の授業も終わりました。三年生たちは来年の三月に卒業で、大学生活のゴールもだんだんと見えてきました。本当に早いものです。こういうことを学生たちとときどき話しています。就職活動も昨年の十二月から企業エントリーが始まり、三年生たちはエントリーシートや履歴書を書いたり、会社説明会に参加したりと、忙しい日々を過ごしています。大学での学業の完成と卒業後の進路の決定。これから卒業までの時間は大学生活を仕上げる大切なときです。充実した時間を過ごして、沢山のものを得てほしいと願っています。

大学服飾文化専攻 4年

四年間最後の後期は、残り僅かな単位の取得と就活が中心となりました。この他の活動として、十二月十四日に課題研究Ⅱの履修者は、三年次より一年半にわたる研究の成果を発表いたしました。また、一月十八日に衣料管理士資格取得希望者は資格認定試験に挑み、論文と消費科学の二科目を受験しました。可否は三月に届く予定です。就職内定者は研修が始まり、さらに未内定者はインターンシップ等を利用して就活を粘り強く継続しています。卒業まで有意義に過ごし、各自の希望に向かって突き進んで欲しいものです。

大学健康栄養学専攻 1年

夏休み、構内で何かを製作している集団を見かけました。近づくると、学生達が大学祭のゲートを作っているとのことでした。入学後初めての長期休暇に大学祭の準備を進めている姿をみて、限られた時間の使い方と意欲を感じました。また、後期にはほとんどの学生が欠席することなく授業に取り組んでいるとのことでした。しかし、学園で開催される講演会等への参加が極端に少ない状態でしたので、今後は様々な企画に積極的に参加して視野を広げてもらいたいものです。

大学健康栄養学専攻 2年

本年度は、昨年度の作つて食べる実習から、献立を考え、調理し、食べてもらう実習が加わり、より専門性の高い授業が多く行われま

した。同時に、校外研修ではセントラルキッチンの見学を行い、大量調理を行う際に重要な食品衛生の大切さを学びました。学校行事では、十月に行われた大学祭にて実行委員長をはじめ、多くの学生が運営スタッフやサークルなどのスタッフとして活躍してくれました。このように後期は、仲間と協力して作業を行う機会が多かったように思います。また、専門科目に関する課題も多く出され、苦勞しながら取り組み姿も見受けられました。

三年生では、学外に出る臨地実習が始まります。大学生活も折り返し地点になりますので、卒業後の進路について、ご家庭でも話し合う機会をもつて頂きたいものです。

大学健康栄養学専攻 3年

三年生は栄養士・管理栄養士の仕事を実際に学ぶ「臨地実習」において貴重な体験を積んできました。実習では実際の業務に携わることで仕事への理解が深まり、また、コミュニケーションの取り方の大切さを肌で実感しました。課題研究では配属先も決定しそれぞれが自分の分野の研究を行っています。その成果は今年の十二月の発表会にてプレゼンテーションすることになっています。また、大学祭ではブルドックスと仙台卸売市場「宮果」と連携した「お好み焼き」を提供し大盛況のうちに終わることが出来ました。さらに、宮城県栄養士会主催の栄養まつりでは昨年に引き続き多くの学生が意欲的に参加し地域住民の方と触れ合う良い機会に恵まれました。四年生では実習、課題研究、就職活動と忙しい日々になりますが健康面にも注意し「層飛躍してほしいと願っています」。

大学健康栄養学専攻 4年

健康栄養学専攻四年生は、後期に予定されていた臨地実習、教育実習も無事終了し、国家試験対策に集中できるようになりました。強化クラスも併設され、模擬試験の成績も徐々に上がつてきています。現在は、二月の最終模擬試験に向けて頑張っている様子が見られます。

就職については、十二月での内定率が七十六%と前年度を上回っています。その後も数人の内定の報告があり、嬉しく思っています。

四年生全員が、笑顔で巣立つていきますように、最後まで教職員でサポートしていききたいと思います。保護者のみなさまも、どうか温かい

目で見守ってあげてください。

大学生生活美術学科 1年

生活美術学科年次の学生たちは、それぞれが魅力的で素晴らしい感覚を有しています。その発露とも言つべき大美恒例の大学祭コンクールには多くの学生が力作を出品しました。受賞に予想外の笑顔を浮かべている学生もいました。まだ自覚されていない才能こそ、よき集団の中で大きく開花する可能性があります。泉区民祭りには、全員がボランティアとして参加し作品展示、運営を行い観客にも好評でした。大学のオープンキャンパスでは高校生と交流しお世話をして大学の好感度アップに大きく貢献してくれました。クリスマスパーティーでは、装飾、企画、イベント運営の中心となり、学生たちを楽しませてくれました。ゼミナール展では、多くの学生がせんだいメディアテーク等で発表を行うなど実技、講義、自主制作に充実した学生生活を送っております。保護者の皆様の応援をよろしく願っています。

大学生生活美術学科 2年

平成二十五年大学祭学科企画「生活美術学科コンクール」において、最優秀賞を受賞した櫻井／櫻胃園子さんは、現在、二月に開催される個展の準備に忙しくしています。

入学以来、授業態度に関する話題を中心に掲載してまいりましたが、ここに至って、彼達／彼女達の多くが、まるで櫻井さんに続けと言わんばかりに作家活動を主体的に開始したことに驚かされます。授業外／学外での展示・発表を目標に日々努力し、成果を上げつつある大美二年生が後期になって急増したことを報告申し上げます。彼達／彼女達の活動の予定については、本学科ブログにてお知らせいたしますので、定期的にご覧下さい。

大学生生活美術学科 3年

コース制導入の期生も、早いもので今年四月には卒業学年になります。各自三年次からコースを登録し、現在は卒業研究のテーマを仮申告したところです。四年間の中で、自分が一番学びたい事に制約を受けずに打ち込める時期でもあり、作品の制作や発表など、学内外で多くの成果を上げることができました。特に、三年次有志による二

つのグループ展が、南町通りのギャラリーで開催されたことは嬉しい限りです。

また、昨年十二月に就職活動が開始となり、今春四月には選考試験が実施されます。卒業後、大学で学んだ事を社会に還元できる様に、積極的に行動して欲しいと思います。

大学生生活美術学科 4年

生活美術学科四年生は、この二年間卒業研究としてまず論文を、そして四年間の集大成となる成果として、各人が今までに習得した技術と知識を駆使しながら様々なジャンルの作品の卒業制作に取り組んでいるところです。

また作品の制作だけではなく、二月二十八日から三月五日にメディアテークで行われる卒業制作展に向けて印刷手配から搬入計画等も同時に進行させるため、日夜大学生生活最後の締めくくりを体験している最中です。

四年次は他にも教育実習や就活等で貴重な体験を積み重ねてきました。

大学での貴重な経験を活かして社会に出てからも美術で表現できる事、活かしていける事を生涯続けて欲しいと思います。

短大食物栄養学専攻 1年

短大生活年目後半に突入した食物栄養学専攻の期生は、入学当初は控え目な感じだった学生達も随分明るく元気な姿を見せるようになりました。夏休み期間中も授業として集団給食施設を見学し、実際に職場で活躍する栄養士の姿を見て、そこで求められる栄養士に必要な知識や技量について学びました。オープンキャンパスでは、回を重ねるごとに、訪れる高校生と積極的に会話している姿が見られ、とても頼もしく思えました。

二年という短い学生生活ですが、来年度は先輩として活躍するだけでなく、校外実習と就職活動も控えています。持ち前の気力と明るさで乗り切つて欲しいと願っています。

短大子ども生活専攻 1年

一年生の後期は、附属幼稚園や保育園で行われる基礎実習Ⅰやこ

ども園、障害児入所施設の見学実習などがあり、現場で働く保育者の姿を実際に見る機会が多くありました。その中で保育者の職務内容等についてもしっかり学んでくれたものと思います。また、十月に行われた大学祭では、皆で力を合わせてフアンタジールを運営しました。たくさんの子どもたちと関わりながら、クラス丸となって盛り上げていこうとする姿はとても素晴らしいものでした。短大の二年間はとても短く、この後行われる基礎実習Ⅱや障害者支援施設の見学実習が終わるとあっという間に二年生になります。日々多忙な生活の中でお互いに励まし合いながら頑張っている姿を見るにつけ、人間的にも大きく成長している様子がうかがえます。この調子で二年生の本実習もお互い助け合いながら力強く乗り切つてもらいたいと思います。

短大子ども生活専攻 2年

十月上旬からの四週間、短大生活で最後の実習となる「幼稚園教育実習」を経験してきました。日誌や指導案作成など、つらく大変なこともありましたが、子どもたちから元気とパワーをもらいながら、たくさんのことを学び、大変充実した実習生活を過ごせたようでした。そして、後期は就職活動も本格的に始まりました。それぞれが自身の進路について真剣に悩み、考え、積極的に園見学、面接を受けに行く姿が見られました。内定をもらった学生は、ここから新たなスタートです。これまで学んできたことを最大限に活かして、立派な社会人になつてほしいと願っています。自信をもつて大きくはばけたい!!

短大生活学専攻 2年

九月上旬、学科コースとしては十数年ぶりに自主研修旅行を計画し、三泊四日で京都・大阪を訪問しました。世界遺産の寺社仏閣を拝観し、鴨川では納涼床料理を堪能したほか、U・S・Jや国立国際美術館にも足を運ぶなど充実した研修となりました。大学祭ではフードエンタテイメントコースの学生がオリジナルM(三島)スイーツを無料提供し、好評を得ました。十二月下旬、今年度で最後の課題研究・作品展示会を東京エレクトロンホール宮城にて開催しました。「絵画とデザイン」「食と栄養」等、六名全員で取り組んできた成果を多くの方にご覧いただきました。生活学専攻を締めくくる学生達の二年間の活躍と成長は、新たな短大の礎になると確信しています。

大学家政学科 教授

菅野 修一

専門分野: 高分子合成

主な担当科目: 有機化学I・II、化学I・II、被服材料学、被服繊維学



修士課程在学中に初めて高分子化学と自分の当時の電気化学のテーマがリンクした。当時話題になっていたクラウンエーテルについて、これをポリマー化しイオン選択性電極の表面被覆材として応用した研究である。高分子化学という学問分野そのものがなやあやしげな世界であるという印象を持っていたのが、この研究により一変した。その後、紆余曲折を経て、重合開始剤の分野にのめり込むようになり現在に至っている。この分野では、リビングラジカル重合の開始剤がエポックメーカーな話題となつてひざいが、初めて話を聞いたときは、なにかあやしげな印象を受けた。さらに、工業的な応用を考えた場合、現在の種々のリビングラジカル重合系はあまりにも複雑であるということが気がかかっていた。そこで、シンプルな重合系で、しかも空気雰囲気下温和な重合条件で進行するリビングラジカル系を提案してきた。喜ばしいことに先日、10年程前の学会で熱心な質問をいただいた研究者から突然電話をいただき、これを最近になって会社のテーマとして種々検討したところ、熱硬化性樹脂の耐熱性向上に 응용して有用であることを見出したとのこと。このような話をお伺いする時が、研究者として非常にうれしく思う瞬間である。一方、イオン液体という一群の物質群がある。文献を読みあさっているうちに、ラジカル重合開始剤としての応用を思いつき、種々検討する中で一定の結果が得られ学会で発表をしたところ、多くの研究者から貴重な意見をお伺いすることが出来た。このような研究に加え、ごく最近では室温で活性な遷移金属系のレドックス重合開始剤に関する研究に着手したばかりである。まだまだ重合開始剤との格闘は続きそうである。

大学生生活美術学科 助教

三浦 輝子

専門分野: 染織

主な担当科目: 工芸基礎(染織)I・II、染織I・II、染色III・IV



織物は基礎となる三原組織、平織・綾織・朱子織があります。それらの組織をベースとして様々な技法が成り立つのですが、本稿では緋織の工程をご紹介します。

緋織は経糸(たていと)と緯糸(よこい)の交差から絵柄を構成していく特徴があり、その原理を念頭に置きながら、デザインを考えます。その後、糸のどの部分を括るのかを明確にするため、下図を原寸サイズに拡大します。

次に糸を準備します。緋の場合、括った緋模様がずれてしまわぬよう、伸縮性の少ない素材を選択する必要があります。自分のイメージした素材が実際の作業に適当かどうか、事前に材料研究をしてから本制作に臨みます。

糸は(せ)の状態で購入し、糸の不純物や汚れを取り除くため精練(せいれん)を行います。精練後、整経長(織機に糸をかけるために必要な経糸の長さ)を割りだし、織り幅に必要な経糸を準備するため整経の作業を行います。経糸に緋を施す場合、整経の段階で柄ごとに糸を分けておきます。その後、原寸下図に沿って防染したい箇所を和紙と糸で括っていきます。

括り終えた糸は、一晩水に浸し、十分に水を浸透させてから染めます。染めた糸は色止め剤に浸してから乾燥させ、括り糸を外します。必要であれば再度括り直し、目的の絵柄になるように糸染めを繰り返します。

緋糸は模様ごとに並べ替え、複雑な絵柄であれば1~2日をかけて柄合わせをします。これまでの内容で織工程の7~8割の時間を要します。この後は糸の張力調節を行い、ひたすら織り進めていきます。

このように長い制作工程を経て完成に至るのですが、必ずしもイメージ通りに仕上がるとは限りません。作品が出来上がる度に一喜一憂し、新たな課題を見つける毎日です。

私の研究

短大生活文化学科 教授

大坪 豊

専門分野: 音楽教育、幼児教育

主な担当科目: 保育内容「人間関係I・II」、音楽基礎技能I・II



「私の研究」として、戦後日本人作曲家の管弦楽法~福井文彦の管弦楽作品をめぐって~と短大のホームページには掲載しました。

第二次世界大戦は明治時代から育んできた西洋音楽の知識と技術と才能に恵まれた人材を失う結果を生みました。幸いにも戦前戦中戦後と音楽活動を脈々と続け戦後日本の後進育成に誠実に携わった音楽家たちが僅かにおります。その中の一人が県内の多くの学校の校歌や混声や子どもの合唱曲の作曲家でもある福井文彦です。宮城県生まれ、吾等のテナー藤原義江の専属ピアノ伴奏者として世界を演奏旅行していた華々しい経歴の他、山田耕筰の次の一步を踏み出した作曲家として有名です。声楽分野の業績で有名ですが福井の生き生きとした音楽の神髄は管弦楽の響きをいつも想起しながらの演奏や作品への取り組みでした。特に単純化されたピアノ伴奏で書かれた作品は、そのことを強く感じさせるものがあります。身近に響きを実現する楽器としてピアノを選んだことさえ思えます。豊かな時代なら、きっと多様な色彩を持つ管弦楽を伴奏としたかったのかもしれない。福井の作曲の器楽作品や放送等のために書かれた編曲作品から、音像に対する熟達した管弦楽の取り扱いが見られ、聴く者は勿論のこと、演奏する者も充分に楽しませ、そのことを喜ぶサービス精神旺盛な福井の姿を感じます。この研究は戦後音楽史の研究です。

しかし、私にとって、世田谷の自宅近所、幼稚園の友達のお父さんで、この家で私は一日中遊んでいました。やがて私が音楽を楽しむようになり恩師となり、若い私にNHK交響楽団の全ての演奏会を生で聴くこと、携わる方々と知り合う機会を下さいました。現在福井の手書きの楽譜やメモは全て私の所にあります。この文章に「福井」と書いてきましたが、本来は先生を付けて記載すべき私でした。

短大生活文化学科 准教授

土屋 葉子

専門分野: 体育学

主な担当科目: 健康スポーツ、健康管理学、体育I・II



私の専門は体育学で、学生の体力等について研究をしています。

全国的に若年層の体力の低下は周知の通りですが、本学の学生も同様の状況です。そこで、私の研究を元に、担当科目である「健康スポーツ」の中で、毎回の10分間走、年4回の20mシャトルラン(新体カテスト)を行い、学生の健康増進並びに体力維持・向上の啓発に取り組んでいます。

また、長期にわたる夏季休業中には、万歩計で日々の歩数を確認し、体力維持・向上を体感してもらえよう、課題を出しています。

私は、私自身の体力維持のためにランニングをしており、近県のマラソン大会に出場していますが、その会場で本学の卒業生に出会うことが近年多くなってきました。聞いてみると、年齢を重ねるにつれ、体力低下を身をもって感じており、短大時代の10分間走を思い出して走り始め、その目標としてのマラソン大会出場ということのようです。

短大時代の授業で私が蒔いた体力についてのその種が、何年後かに花開いた様な思いがし、非常に嬉しく感じています。

また、近年は、学生の日常生活の基本的事項についての研究もしています。保育者養成校として来年度で子ども生活専攻が10年目を迎えますが、キャリアアップセミナーという講義で、学生の様々なマナーについて指導をしています。具体的には、挨拶・言葉遣い・食事のマナー・立ち居振る舞い等です。学生は2年次に10週間の実習(保育園・施設・幼稚園)に行きますが、実習先よりマナーについて指導をいただくことが増えてきました。

そこで実習を終えた学生からアンケートをとり、どのような指導を受けたか、また、短大の中で今後どのようなことをカリキュラムに取り入れたほうが良いか、教育内容の検討を行っています。

両研究ともすぐ結果の現れることではないと思いますが、学生の社会人基礎力向上のため、今後も取り組んで参ります。

開放講座／公開講座

○平成二十五年八月三十日(土)、九月一日(日)、七日(土)

平成二十五年度みやぎ県民大学 大学等開放講座(短大主催)

「食中毒とその予防法」

食中毒の主な原因となる細菌について受講した後、実際に顕微鏡で見たり、健康被害を防ぐ方法として、手洗いの効果などを実践的に学習。短大の齋藤教授、益田講師、津渡講師、松本助手が指導に当たりました。

受講生の方々は、「食中毒の現状」、「食中毒菌を知る」、「生活における食中毒予防」を三日間通して受講され、講話に、実験に、熱心に取り組んでいました。

○平成二十五年十一月九日(土)、十一月三十日(土)

公開講座①(生活美術学科主催)

「人物を作る〜平面から立体へ〜」

公開講座②(家政学科主催)

「食のルーツをみてみよう&チーズの基礎知識」

九日午前中にヌードモデルを使ってクロッキーあるいはデッサンをし、午後は、立体表現としてそのデッサンを基に彫塑を行いました。その後本学で乾燥、焼成しテラコッタの人体立像に仕上げ、三十日に講習会が行われました。受講者の方々は、普段ではあまり体験することのない作業を楽しみ、それぞれ達成感と満足感を得られた様子でした。

三十日午後からは、午前中の公開講座①に引き続き、家政学科主催の公開講座②を開催。

「食のルーツをみてみよう」は、日常よく知っている食べ物でも誕生秘話を知ると、ひと味違って感じるかも…という内容でお話しされ、受講者からは質疑応答も活発に交わされていました。「チーズの基礎知識」



は、チーズの知識を詰め込んだ後、熟成期間が異なるチーズを実際に試食しました。

どちらの講座も和やかな雰囲気、受講者の満足度はかなり高かったようです。中にはちょうど時間が短かったせいか、もっと話を聴きたかったという受講者も…。

このように本学では毎年、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。興味のある方は是非お問い合わせください。(企画課 〇三二二七二一七五三)

大学祭およびファッションショー

本年度の大学祭は、平成二十五年十月十九日と二十日の二日間にわたって開催されました。両日とも、大勢の方が来場されました。屋外では各種団体による飲食関係や小物・雑貨などの模擬店が軒を連ね、大いに賑わっていました。また、五号館前の特設ステージでは音楽関係の演奏や大道芸、チャリティーオークションや伝統芸能など様々なイベントが開催され、盛り上がりがありました。

校舎内では文化系団体の作品展示や、学科・専攻による学習内容に関する展示・発表などが行われ、来場者が展示や発表に興味を示している様子でした。八十周年棟では、短期大学部子ども生活専攻による「ファンタジーランド」が開催され、小さい子供を連れた家族が劇や様々な遊びを楽しんでいました。また、一日目はオーブンキャンプも同時開催され、本学受験を考えている高校生の姿も多く見られました。

一日目の午後三時からは、恒例のファッションショーが開催されました。今年は「ホンモノ」をテーマに、学生たちの手作りによる衣装の数々が披露されました。ファッションショーはデザイナー、モデル、会場の運営などすべての役割を学生が担当しています。華麗で、かつ迫力あ



るステージに、会場からは多くの拍手が送られていました。大学祭は二日目午後のお笑い芸人によるステージ、そして引き続き行われた後夜祭をもって、全日程を無事に終えました。

T S B アートコンペティション

二〇二〇年に学校法人三島学園は、創立百十周年を迎え、東北生活文化大学および高等学校主催による、中・高校生を対象とした「S E I B U N アートコンペティション」を開催して参りました。

今般、高校生部門を発展的に独立させ、将来を担う高校生世代の新しい価値観の表出を目的として、「第二回 T S B アートコンペティション」を開催いたしました。「大切にしたいもの」のテーマのもと、おかげさまで県内外の十二校、三六名の力作が寄せられました。

特別審査員として鉛筆を主としたモノクロームの表現で、国内外にて高い評価を得ている画家の木下晋氏をお迎えし、厳正なる審査を行い、各賞を決定いたしました。

平成二十五年十二月二日(土)十三時よりせんだいメディアテーク二階オープンスクエアを会場に表彰式を行い、三日(日)までの二日間の公開展示を行いました。表彰式には、受賞者のほぼ全員の出席をいただき、木下晋先生より表彰をしていただきました。

また、展覧会会期中に「一般来場者の方々に「観客賞」の選出をお願いしたことで展覧会をじっくりと見ていただくことができました。

今回、はじめての外部会場であるせんだいメディアテークで「T S B アートコンペティション」の受賞作品の展示を行うことは、本学の認知度を高め、美術に興味・関心をもつ高校生の活躍と芸術活動を発信する場としての役割を持つております。これからは絵画・平面作品によるコンペティションを開催し、芸術文化の理解と文化向上ならびに地域社会への一層の発展に寄与することを目的として本コンペティションを継続して参ります。



DV防止講演会を開催しました(平成25年4月5日)

近年、配偶者間のみならず若い世代の恋人間にも暴力(DVおよびデートDV)が問題になっていることから、今年度は学生対象に「性暴力(デートDV・セクハラなど)～自分だけは大丈夫と思っているあなたへ～」と題して八幡悦子先生(NPO法人ハーティ仙台代表理事)による講演会を開催しました。たくさんの事例を通して参加者全員がともに考える講演で、DVについてそれぞれが自分自身で捉え直す良い機会となりました。

DVは男女間に力の差が生じたとき(いずれかが優位に立ったとき)に発生し、DVであるかどうかの判断するのはあくまでも当事者本人であり、そのとき本人が嫌だと感じたのであれば、夫であれ、恋人であれ、肉親であれ、親戚であれDVになるのだということを学びました。これはいじめやセクハラ問題にも共通するものだとのことです。

いじめ等の問題は、「いじめたつもりはなかった(DVのつもりはなかった、セクハラはなかった)。愛情だと思って接してきた。」と主張する人がほとんどですが、相手が嫌だと感じたのであれば、それはいじめであり、DVにもセクハラにもなり得ます。いじめ等の判断をするのはDVと同じように、あくまでも当事者本人がどう感じたかということが重要です。

自分のした行動が相手を傷つけたりしてはいないか、相手は嫌がってはいないか等、常に相手の気持ちを思いやりながら人間関係を築いていきたいものです。

下記にデートDVチェックリスト(講演会資料)を紹介しますのでチェックしてみてください。1つでも当てはまればDVに該当します。

デートDVチェックリスト ハーティ仙台

精神的暴力

- あなたを、友人の前で「こいつ、頭わるい」とか「気がきかない」と言う。(侮辱)
- 癪癪を起こすと壁をなぐったり、物に八つ当たりしたり、大声でどなる。(脅迫)
- 「別れるなんて許さない、そんな事になったら、自殺する」という。(脅迫)
- 別れると言うと「君との"すべての出来事"を、親や友人達に話す」という。(脅迫)
- 上手く行かない事柄は、すべてあなたのせいにする。(責任転嫁)
- あなたが友達と交際するのを嫌がる。(拘束)
- 携帯のアドレスをチェックし、男性のアドレスは「消せ」と言う。(孤立させる、拘束)
- 携帯にすぐ出ないと、とても不機嫌になる。メールもすぐ返信しないと怒る。(拘束)
- あなたが、たとえ同性でも、友人との宿泊旅行や遅い帰宅を知ると怒る。(孤立させる、拘束)
- 「不機嫌にさせる君が悪い」という。(責任転嫁)
- あなたは、話し合いたくても延々と非難されたり、無視されるので、無駄だと感じている。(孤立)

身体的暴力

- あなたを平手で打ったり、あざを作らせたりすることがある。
- あなたを蹴ったり、髪を引っ張ったり、壁に押し付けたりする。
- あなたをゆすったり、つねったり、閉じ込めたりする。

- 首を絞めたり、凶器を出す。
- 熱いものを押し付け、火傷させたりする。

経済的暴力

- あなたに「立て替えて」と言って、お金を借りるが、返されたためしはない。
- 付き合いに消費した経費を記録し、恩に着せ、延々といやみをいう。

性的暴力

- あなたは、セックスは気が進まないが、彼が不機嫌になるのが怖くて断れない。
- あなたが、性感感染症を心配するのに「信じていないからだ」「神経質だ」と言って、予防しない。
- 彼は「大丈夫」といって、避妊しない。
- あなたのいやな写真を撮り、別れるなら、プライベート写真を公表するという。(脅迫)
- デブ・ブス・みっともないと言う。(侮辱)
- 見たくないポルノを見せられる、同じことをさせられる。

そのため

- あなたは、いつも 神経を張り詰めている。
- あなたは、彼を怒らせないために、あきらめたことがたくさんある。
- 彼は、爆発を起こした後、急に優しくなり、二度としないとにおわせ、あなたを思い留まらせる。しかし再び爆発は繰り返される。しかもそのサイクルは確実に、激しくなっているように思う。
- あなたは、こんな状況を、だれにも話せない。話すともっとつらいことがおきると思っている。



DVについて学んでも知っていてもDVが起こってしまうことがあります。

そのためにも「No(イヤ)」「Go(逃げる)」「Tell(話す)」という対処方法は覚えておきましょう!

そして、DVの相談を受けた方はよく話を聴くことです。その際には、「あなたも悪い」等、決して被害者を責めないことがとても大切です。

善し悪しの判断は専門家にまかせ、とにかくよく話を聴いて専門機関につなげましょう。

＜DVや性暴力の電話相談＞

ハーティ仙台:022-274-1885

(月～金 13:30～16:30、第1～4火 18:30～21:00)

＜メール相談＞

リプロルームせんだい(からだ性と心の相談)

ripuro@ya2.so-net.ne.jp(「リプロルームせんだい」で検索可)

就職支援センターから

◎学習する目的は『論理とコミュニケーション力』

平成26年1月17日に、大学3年生と短大1年生を主な対象として、栗匠三全専務取締役の田中正人様による「成長する社会人」と題する講演会が行われました。企業経営の最前線で活躍なさっている方の講演だけに大局的な観点からの内容でした。その中で、田中様が、これからの社会人に特に求められる資質として『論理とコミュニケーション力』を強調していました。

保護者の世代では年功序列が当然であったかもしれませんが、今や日本の企業もグローバル化しており、企業内で求められる能力や技能を身につけていなければ、社会人としては成長していかなくなります。A4の用紙を5枚も6枚も使った企画書では、社内では役に立ちません。図や矢印などを使ってでも、A4の用紙1枚で「なぜこのような事業を立ち上げなければならないのか」「この事業によってどのような効果が得られるのか」「この事業のリスクはどこにあるのか」などを説明できる能力、それが『論理とコミュニケーション力』です。

学生は、大学でそれぞれ専門的な科目の指導を受けて専門的な知識や技能を身につけています。しかし、専門的な知識を身につけることだけではなく、社会人として通用する基礎的な実力を身につけることが重要です。私たち就職支援センターとしては、田中様の講演会だけでなく、様々な機会を通して学生に学習することの目的を再確認させていきたいと考えています。